

2022.8.7 平和聖日礼拝

平和聖日礼拝（家庭で礼拝を守る場合の式順）

黙 禱

聖 書 創世記9章8-17節

説 教 「架け橋になる」 牧師 三浦 啓

讃美歌 371「このこどもたちが」

献 金

黙 禱

8月の第一主日は、日本基督教団の行事暦で「平和聖日」と定められています。

教団は1962年に毎年8月の第1聖日を「平和聖日」と決めました。以降、この日に神様の御旨としての平和を聖書から学び、平和の実現を求めて真剣な祈りを捧げ続けてきました。日本基督教団で「平和聖日」が制定されるに至ったのは、西中国教区からの訴えを受けとめてのことであったと聞いています。広島への原爆投下によって被爆した牧師・信徒たちが、1961年の8月6日に、広島原爆投下の日を覚えて「平和聖日」を守るようにと、教団に要請しました。被爆キリスト者たちの訴えは、広く教団諸教会に届き、翌1962年、教団は8月の第1聖日を「平和聖日」と定めたのです。

その後、教団は1967年3月に「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」を、当時の教団議長・鈴木正久の名前で公にすることになります。この戦責告白を踏まえ、「平和聖日」に、かつて教団が戦争に協力した罪の告白を含めて、主の福音に照らし、今私たちはどう生きるべきかを問いつつ、礼拝を捧げてきました。

こうした教団の歴史とそこに大きく働いた被爆キリスト者たちの祈り・願いを私たちもしっかりと受けとめ、8月の第一主日にあたり、「平和聖日」の礼拝を捧げ、平和実現への祈りと決意とを新たにしたいと願います。

さて、創世記6章から10章までに描かれているのが「ノアの箱舟の物語」です。物語の終盤に、重要な言葉として証言されているのが、ノアとの間に結ばれた神様の契約です。今日はこの契約の言葉の部分について見ていきたいと思えます。

6章5-6節に洪水を起こすに至った神様の御心が記されています。「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」。

神は、人間たちが形成しつつある世界を一度リセットするために、大洪水を起こすことを決断なさったというのです。そして、その時代にあって神様に従う無垢な存在であったノアに命じて、大きな箱舟を建造させ、その中に世界の生き物をひとつがいつ入れ、破滅状況の中にも生き延びさせたのでした。

40日40夜の大雨で大洪水が起こり、世界に満ちた大量の水は150日間も引かなかったため、地上の生き物たちは皆滅んでしまいました。箱舟に乗っていた人間をはじめ、ひとつがいつの生き物だけが助かりました。

9節以下にまず神様はこう語られています。

「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない」。

この契約の下、二度と洪水という破滅状況を起こさないと語られています。

今日、共に注目したいのは、12節以下の神様の言葉です。

「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める」。

契約の確かなしるしとして、神様は雲の中に虹を置かれると言うのです。この虹が現れる時、「地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める」と約束されています。ノアの執り成しの働きにより、破滅と絶滅を逃れた人間と世界に生きるもの全てとの間に置かれた祝福の契約です。

虹は、英語でrainbowと言います。rainは雨、そしてbowとは弓です。直訳すれば雨の弓、空に架かる弓を意味しています。ヘブライ語でも、虹は同じように弓を意味する言葉が使われています。ヘブライ語では、弓から導かれる虹とは、裁きの矢である雷を発する、巨大で強力な神様の武器をイメージしているようです。

このように元来は武器であったものを契約のしるしとしたこと、そこには空に虹が実際に架かっている姿が大きく影響しているであろうと言われます。雨から天気が急激に回復し、空中にまだ雨粒が残っている中に日が差すと虹が架かります。大きな半円を描き、地から湧き上がるようにして空に美しい弧を描きます。

これは見方によっては、架け橋のように感じられます。言葉の成り立ちからして武器というイメージを虹は持っていますが、虹を弓と見るのではなく、虹の架かった様を、広い大地いっばいに神様が大きな架け橋をかけてくださった、これ

が虹のもう一つのイメージではないか、そのように語る人があります。

神様は武器である弓を手放し、地に置いて、それを新たに架け橋として用いてくださる、神様と人との間に再度橋が架けられる、それが洪水を経て改めて結ばれた神様の契約の意味なのだとされるのです。

テモテへの手紙 I 2 章 1 節 - 2 節にこう語られています。「そこで、まず第一に勧めます。願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい。王たちやすべての高官のためにもささげなさい。わたしたちが常に信心と品位を保ち、平穏で落ち着いた生活を送るためです」。

この手紙の宛先であるテモテが留まっていたエフェソ教会は、当時、キリスト教徒たちは王たちや高官からの激しい迫害に苦しんでいました。自分たちを取り囲む過酷な状況の中に宣教活動を進めていくのに必要なこととして、パウロはキリスト者を迫害する者をも含めて、全ての人々を覚える「願いと祈りと執り成しと感謝」を捧げることを勧めたのです。自分たちのいのちを脅かす者たちをも覚える、そんな言わば無謀なことをパウロは求め、勧めています。

このパウロの勧めの重みを受けとめながら、使徒教父のエウセビオスの言葉を思い起こしました。3世紀から4世紀に活躍したカイサリアの司教で、使徒教父の一人であったのがエウセビオスです。この人は『教会史』という本を書き残し、皇帝コンスタンティヌスの信頼を得て、ニカイア公会議を主導したことでも知られています。そのエウセビオスは次のような印象的な言葉を残しました。

“キリスト教は分裂した世界において、紛れもない架け橋として仕える”。

イエス・キリストの福音に立って世界の現実を注意深く見つめる時、私たちキリスト者は、あるいは教会・キリスト教は、どのような祈り・奉仕を担うべきなのか、エウセビオスは“分裂した世界において…架け橋として仕える”と語り、平和と和解とを執りなしていく使命を示したのでした。

テモテの手紙 I 2 章 5 節以下でパウロは語っています。

「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました」。

ここには、神様と人の間に立ち、両者を執りなすために命まで捨て、人々の罪を贖ってくださったイエス様の十字架の真実が宣べ伝えられています。

エウセビオスの“キリスト教は分裂した世界において、紛れもない架け橋として仕える”との語りの背後に、神様と人との仲介者としてその身を捧げられたイエス様の生き方・福音への応答の姿勢を読み取ることができます。

1970年にサイモン&ガーファンクルが歌った「明日に架ける橋」という曲があります。原曲はポール・サイモンの知り合いの牧師が作ったゴスペルソングで、当初は Hymn (賛美歌) という題名で発表される予定だったと聞きます。原題は“Bridge Over Troubled Water”です。つまり「荒海・困難に架ける橋」ですが、日本発売に当たっては意識し、「明日に架ける橋」という題名で広く知られてい

ます。

2001年9月11日にアメリカで同時多発テロが起きました。毎年9月11日に近い主日には、このテロ事件で命を失った3千人を超える方々の追悼礼拝がニューヨークの教会にて行われています。

ある時の追悼礼拝で、ある方が、命を失った数多くの人々、愛する者を失い、深い悲しみの中に置かれている人々を憶え、事件の背後にある実に厳しい分断の状況を見つめながら祈りを捧げたそうです。祈りの言葉は次のようなものです。

「私たちは分断と悲しみの世界のただ中で、荒海に架ける橋になろう」

これは、サイモン&ガーファンクルの「明日に架ける橋」の一節を引用しての祈りでした。荒れ狂っている海、絶望の淵にしか見えない世界の現実を前にして、諦めるのでもなく、テロを起こした陣営をひたすら敵視するのでもなく、“私がこの身を横たえ…架け橋となろう”と、和解への決断を込めた執り成しを、記念の礼拝にて祈った人がいたのです。多くの人々が、“私たちは分断と悲しみの世界のただ中で、荒海に架ける橋になろう”、大惨事の悲しみの只中で、この使命をこそ再確認したのだと伝えられています。

こうした執り成しと和解への祈りや取り組みこそが、今日を共に学んだノアとの間に結ばれた神様の契約に誠実に生きることにつながるのではないのでしょうか。

神様は武器である弓を手放し、地に置いて、それを新たに架け橋として、神様と人との間に橋が架けることを約束されました。こうしたメッセージを「創世記」の「天地創造物語」から読み取る私たちは、イエス様の十字架の贖いと執り成しの恵みを受けて、神様と人との関係が主によって整えられたことに感謝し、なお存在するこの世界の分断や分裂に注意深く歩みたいと願います。

現在の世界、日本に幾つもの分断があり、その溝は埋めがたく深くなっています。国どうし、宗教どうしのみならず、同じ国の中、同じ信仰を持つ者の間でも、分断や分裂が顕著です。最も身近な日本基督教団に注目しても、一致どころか、少しでもわかり合おうとする歩み寄りや対話が諦められていることを感じます。テモテへの手紙Ⅰのメッセージに即して、私たちはさまざまな理由で分断された両者が一歩ずつでも歩み寄ることを祈り求めたいと思います。そして、私たちも分断と悲しみの世界のただ中で、荒海に架ける橋になっていくという使命が与えられていることを覚え、身近なところから平和を実現していく歩みを担っていきましょう。

(牧師 三浦 啓)